

第九十四話

満仲朝臣移多田致仕付渡部綱事

『前太平記』上 卷第十四 二八五頁から二八八頁より

[頼光、父の後を継ぐ]

満仲朝臣が去年からお勤めになっている多田の城は、何の問題もなく完成したので、今年天禄元年三月十五日に、その城に入りなさり、新田城とお名付けになる。元から神より与えられた城地であるから、地の利の優れている事は、言わなくと

素より神明授与の城地なれば、地の利の優れたる事は論ずるに

もわかるといっても、山は険しく、馬の蹄では行く事が出来ず、城壁は突き出て、

足らずと雖も、山岳崎嶇として馬蹄に及ばず、城壁凸出して

強い弓に負けず、西国一の城塞である。さて、そこにお住みになって、よくよく過

弓勢に掛からず、

去を重ねてお思い出しになって、「過ぎ去った天慶の頃、西戎の純友を誅殺したが、ある者は味方となり、ある者は敵として決別しても、一緒に命を落とす兵士

或ひは御方と成り、或ひは敵と分かつと雖も、与に士卒の命を殞とす者、

の、もうその数は分からない。その妻子、従者がこのことを嘆いたことはどれほ

未だ其数を知らず。

どだろうか。もったいなくも、その軍功によって、異例の格上げで高官につらな

苟も 其軍功に依って 不次の高官に列なり、

り、必要以上の賞禄を預かる。これはしかしながら、人々の命を失うことをもつ

過分の賞禄に預かる。 是併しながら 衆の命を失へるを以て

てこそ、私の幸福となったのだなあ。先聖は(このようなことを)好むはずがない。

恐れ多くも、天慶の時の天皇は、あの亡くなった兵たちのため、千人の僧を呼び、

彼亡卒の為に 千僧を供養して、

供養して、黄泉の扉にお導きになる。その慈悲の心の美しさを見ることが出来た。

菩提の門に導き給ふ。 其慈心の美見つべし。

言うまでもなく、私自ら陣営を破り、自分の手で強豪を殺す。その全ての罪は、ど

況んや 我自ら堅陣を破り、 手づから強卒を誅す。

うしたら逃れるところがあるだろうか。それ以来、時に(世間からの名)の広い認知

時に触れ事に臨んで、

に直面し、官を兼ね、重い職に預かり、朝廷からの恩は十分以上にもらっている。

兼官重職に預かり、 朝恩身に余れり。

それでいて、天体が満ちて(→月日はうつり)、高い木は風邪に倒れる(→大きなも

然も

天道盈てるを缺き、

喬木風に倒る。

のにも終わりはくる)。かりに私は今、恩に報いる感謝の思いがあると言っても、

仮令、我今

報謝の心有りと雖も、

朝廷の家臣として、命令を得たならば、止めることはできなくて、またどれほどの

朝廷の臣として

詔命を得ば、

已むこと得ずして、

又幾許の

悪行を行うのか。功績が成就して、『五湖に舟を浮かべる_(老)』の故事を辿り、隠れ

罪業を施さん。

如かじ、功有つて

五湖に泛べるの蹤を尋ね、

住むことには及ばないだろう」と思って、辞表を奉って、官職をお退きになる。こ

隠れ居らんには」

れによって、(満仲の)公務や勤番などは、養子の満茂にお命じになるはずだった

が、その身は病気がちであるので、全うできないということで、しっかりと辞退し

なさることによって、兵部丞・頼光がこれを相続なさる。この時、お年は十七歳で

いらっしゃる。同じ年の五月、冷泉院の判官代_(貳)の位をお受けになる。

【綱、頼光の郎従となる】

このようなことがあった頃に、相応の郎従を一人力添えにしたいため、父の朝臣

然るべき郎従一人扶助した度き由、

のおそばに申し上げるための使いを派遣なさったところ、「渡部源次がいいだろ

「渡部源次然るべし」

う」と言って、まもなくして綱を上洛なされたのだった。頼光は格別に喜んで、腹心にと頼りになさった。さて、この綱と申し上げる者は、故武蔵守箕田仕の孫である。六孫王に従って、西海道でたくさんの軍功があったため、武州太守に官を任じられたが、天慶五年、幼い一子だけを残して亡くなってしまう。その孤児は成長して、源次充と名乗る。充は無官で箕田に暮らす。天曆七年、享年二十一歳で死んでしまう。その時に限って、充の妻は子を身籠っていたため、四十九日もまだたたな

充の室懐胎したりけるに、

中陰未だ満たざるに

かったが産する。源次綱がこれである。ところが、母は産後十日もしないうち

平産す。

然るに其母、産後十日を出でざるに、

に、また亡くなってしまったのだった。産み落とした者は、生まれる前後、たった

又空しくぞ成りにける。

三十日余りの間に、両親に先立たれ孤児となったが、叔母がこれを保護して、自分

父母に後れて孤と成りしを、

の子のようにかわいがり、大切に育てたが、元々、この叔母は気持ちがしっかりし

心賢き者にて、

た者で、「おやおや、このような都から離れた国に隠れ住んでいては、幼い子供のためにふさわしくない。なにはともあれ、都に上り、どのような方にも給仕させて、領地の一つの主にでも(させよう)」と思ったので、すぐに決心して自分の懐に

所領一所の主にも」

抱いて、長い道のりを歩き、都まで上った。摂津国渡部にある地に、僅かな縁があって、昨日今日と時を過ごしていたが、年月が移り変わって、少年は十二歳となったのだった。その体つきは、他の子と同じように変わって、成長後に遠く思いを馳

其為人

尋常に替はりて、

せる次第である。さて、仁明天皇のひ孫、源二敦という者がいる。元々、同じ分家

素より同じ支流にて、

で、その上に、満仲の婿であったので、「内縁といい、世間の縁といい、どのみち

「内縁と云ひ、世の寄せと云ひ、旁

悪いことではないだろう。頼んでみたい」と思い、叔母はすぐに少年と一緒に連れ

宜しかるべし。

て行って、その所に着いて、うんぬんと事の次第を詳しく語る。敦はたいそう驚き、「今まで知らなかったことが残念だ。なんともこういう噂もお聞きにならなかったことが嘆かわしい。確かに同じ一族として、どうしていい加減な道理があろう

争で疎略の義有らんや。

か。さぞや、この年月、辛い思いでお過ごしになっていたのだろう」と申し上げて、丁寧にご馳走でもてなして、すぐに引き取って養子として、実子刑部省(参)次官の昵と同じように綱を育てた。ある日、満仲朝臣の邸宅に伺った時に、折がよければ、少年をご紹介申し上げようと思い、その少年をお連れになった。満仲朝臣と対面して、色々と雑談しなされたところ、少年を横目に見て、不審そうにじっと見つめていらっしやったが、話が終わるのを待ち切れず、「そこにいる少年は誰だ」とお尋ねになったところ、敦は膝を立て直し、「この者は故武蔵守仕の孫である者でございますが、これこれの事情で孤児となり、摂州渡部で、(この子の)叔母が育てていましたのを、去年の冬から私の元に呼び寄せております。ご意向をもって、貴人にお目にかかっていたきたいと思いましたが、まだその機会が出来なくて、時間がたってしまいました」と、全て詳しくお話になったところ、満仲は頷いて、「そのような次第でさっきから、目つきは普通ではないと思ったが、武蔵国守の子

眼刺し尋常ならずと思ひしに、

孫であるといえますのか。本当に故武州は、満仲が若い時、西海道で軍を用いる時以外でさえも、朝夕の間も開けることなく交流したので、父兄のように思い込んでいたところ、上洛の後は、共に任務について、東西に別れてしまった。それだから、再会はいつであろうかと、その面影が捨て難く、しばらくして、亡くなられたと聞いて、たいへん気の毒に思ったのである。その嫡孫である人が刑部少輔の兄弟として親しくしたとすると、私にとっても孫である。どうして、遠慮をいたそう

争でか等閑を存ぜん。

か。今から私の傍に置いて世話をしよう」と言って、すぐに主従の契りのお盃をお

我が傍に置ひて介抱を加ふべし」とて、

則ち主従約盟の御盃を下され、

下しになり、「箕田は祖父仕が勤め、官位を下げられ、移り住んだ遠地である。父

「箕田は祖父仕貶謫の地なり。

の充は箕田を名乗り、早世した。どのみち不吉である。摂州渡部で育ったので、渡

旁不吉なり。

部源次綱と名乗るのがよい」と言って、自ら烏帽子をお与えになった。その後、成

手づから御烏帽子を下されける。

長につれて、智勇は群を抜き、力量は人より優れ、素晴らしい一家の補佐となった

目出度き一家の補佐なりけり。

のだった。

注釈

※壺・五湖に舟を浮かべる……中国春秋時代の范蠡の故事。すべての役目を終えた彼は湖に舟を浮かべて消え去ったという逸話がある。また、日本でもその故事から作られた漢詩がある。三条西実隆（1455～1537）の漢

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

詩。致仕偶成「三十年來朝市塵 片舟歸去五湖春 平生慚愧無功業 合對白?終此身（三十年間世俗の中で身を汚した。范蠡のように春の五湖（太湖に舟を浮かべて帰り去ろう。いままで彼のような功績がないことを恥じてきた。この時を以てカモメと共に生涯を終えよう））」

※貳・冷泉院の判官代……判官代は上皇や女院に関する事務をとる役所の事務官。つまり、頼光は冷泉院の下にて、事務をしていたということ。

※参・刑部省……裁判・処罰に関する事柄を扱う役所。

源頼光第一の家臣渡部綱の登場です。彼も『前太平記』では多くの活躍をする魅力的な人物です。

綱は本作品ではよく「源次」という名前と呼ばれます。これは通称であり、正式な名は源綱と立派な源氏の血を引いていますが、渡部氏の嫡流は皆「源次」という通称を持つようです。また、綱はたいそうな美男子だったといわれており、彼の容姿に関するエピソードは残念ながら見かけたことは有りませんが、彼の先祖である源融はかの『源氏物語』の光源氏のモデルといわれる一人でありますので、綱もその美しさを継いでいたのでしょうか。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m()m

公開：2015/5/23

改訂：2021/3

海熊童子